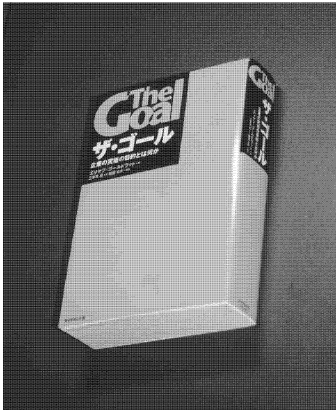


## 「ザ・ゴール (The Goal)」

田端 哲夫



「主人公アレックス・ロゴは、ある機械メーカーの工場長。長引く採算悪化を理由に、突然、本社から工場閉鎖を告げられる。残された時間は、わずかに三ヶ月。それまでに収益体制を改善しなければ、工場は閉鎖される。多くの人が職を失ってしまうことになる。半ば諦めかけていた彼だったが、学生時代の恩師ジョナに偶然再会したことをきっかけに、工場再建へ向けて意欲を燃やし始める。」

このような小説で書かれているサプライチェーンマネジメントを教えてくれる専門書の一冊です。小説の中で、主人公のロゴは、恩師であるジョナから「制約条件の理論 (Theory Of Constraints : TOC)」という新しい考えを学ぶ。この理論は『ザ・ゴール』の著者で、物理学者でもあるエリヤフ・ゴールドラット博士が、1980年代初めに編み出したものです。しかし、日本では2001年5月にやっと翻訳された本なのです。1984年にこの原作本はできていたが、ゴールドラット博士は「10年前、もし日本の企業経営者が私の理論を学んだとしたら、日本の貿易黒字は二倍に拡大するだろうと予測しました。」といい、景気の良かった日本に対して大きな懸念を持っていて、欧米企業と日本企業のギャップが無くなったという理由で10年遅れの日本語版の出版を許可したようです。

しかし、ゴールドラット博士は、ジャスト・イン・タイム (JIT) について画期的なコンセプトで企業に多大な影響を与えたとしています。JIT は、部分最適を追求するものと一部では考えられているが、実は部分最適が全体最適にとってはマイナスになりうることを理解していたとして、全体最適に着眼していたことは、まさに天才的であるといっています。一人ひとりの作業者に高品質の製品を作らせることが最重要なのではなく、生産過程の下流で起きている状況によって、何もしないことが最善の方策となりうる、つまり部分最適を犠牲にすることが、全体最適のためには必要である、ということを提示したわけです。TOC とは、「全体最適」の思想であります。組織の能力を短期間にかつ最大限に高めるには、組織で最も弱い部分を集中的に強化すれば良いと述べています。各所でバラバラに行われる改善は「部分最適」にすぎず、部分最適の総和は必ずしも全体最適につながらないということを感じさせた理論であります。アメリカは、1990年代にこの理論を応用して着実に復権してきたのです。

今、2001年からビジネスマンの世界では、「千と千尋の神隠し」のアニメを見るよりもよく

読まれている本になっているのです。読みやすく、製造業のことも良く分かり、小説で書かれているので気楽に読める本で、経営学の最先端であるサプライチェーン・マネジメントのことが学ぶことのできる本なのです。一度、本屋で手にとって見てみることをお勧めいたします。